



Title	ジュリアン・グリーンの出発 : 『地上の旅人』を中心に
Author(s)	原田, 武
Citation	études françaises. 1973, 11, p. 43-56
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93629
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ジュリアン・グリーンの出発

——『地上の旅人』を中心に——

原 田 武

ジュリアン・グリーンは、つぎつぎに新しい問題を自らに課していくというより、自分に固有な限られたテーマを執拗に追求する型の作家である。かれの場合、変貌や脱皮ではなく、ほとんど終生を通じて変らない開心をめぐる、深化あるいは沈潜が問題であろう。

ここにとりあげる中編『地上の旅人』(*Le Voyageur sur la terre*)⁽¹⁾は、短編『クリスチーナ』、長編『モン・シネール』とともに、かれの作品としてはもっとも早い時期に属する。1924年、グリーン24歳の年の、11月23日から27日の間に着手され、翌25年2月20日に出来上ったと原稿に記されている(発表は1926年8月、9月号のN.R.F.誌)。1924年という年は、4月に、*fanatique* とさえいってよいあの激越なパンフレット『フランスのカトリック教徒に反対する』(*Pamphlet contre les catholiques de France*)が一日で書き上げられ、7月にはのちに『モン・シネール』となるべき断片が書かれている。それ以前にも創作のころみはあったにしても(『クリスチーナ』の執筆は1923年の7月から8月にかけてと推定されている)、この時期をもってかれの創作活動の本格的な出発点とみなすことは可能であろう。この小説においても、簡潔でデッサンのたしかな文体といい、ひとつの雰囲気喚起といい、若書きのふたしかさを少しも感じさせないのだ。

いわゆる二重人格をあつかった幻想小説『地上の旅人』のなかでも、のちのグリーンを予告するテーマをいくつもひろい上げることができる。この題名自身がすでにはなはだグリーン的といわねばならないが⁽²⁾、前半部分の、主人公ダニエルをとりまくおじたちの家庭の描写は、同じ建物に暮

しながらまったく交流のない孤独な人たちの生活として、次作『モン・シネール』から『アドリエヌ・ムジュラ』へとひきつがれていく主題である。いかにも「パスカルの眼で眺められたバルザック」という評語⁽³⁾がふさわしい、単調で平俗ななかに人間存在の根底から発する深い悲しみをたたえた、この種の家計の緻密な描写は、より詳細なかたちで、『レヴィアタン』や『漂流物』でもとり上げられるだろう。後半、フェアファックスの大学の情景は、ほとんどそのまま『モイラ』でも用いられるし、〈家出〉のテーマは『アドリエヌ・ムジュラ』、『漂流物』、『真夜中』に共通する。そのほか、孤児が親戚にひきとられるという設定についても、だれかに追いかけているという妄執にしても、いきなり鏡に自分の姿を見る無気味な経験にしても、みな、このさきグリーンがひんぱんに用いるモチーフである。すべて、プレヤード版の巻末で編者ジャック・プチによって詳しく指摘されている通りである。

けれども、『地上の旅人』を問題にするとすれば、むしろ、どうしてもこの小説のもつ幻想的な性格に注目せざるをえない。早く両親を失い、極度に内省的な、すべてを自分内部の事件としてとらえるといった型の青年、ダニエル・オドノヴァンは、おぼの父にあたる人物からの援助で、おじの家を出たあと、フェアファックスの大学町に来る。ここで、実はかれ自身にほかならないポールという青年と知りあう。大まかにいって、ポールはダニエルの〈たましい〉、〈天上的〉な部分を代表していると考えることができ、この男の導きで（あるいはこの男になりかわって）、ダニエルは自らの〈地上的〉なものから身を解き放っていく。わずかにかれの所有物といえる書物の類を手はじめに、さいごには自らの身体そのものをうち棄てる。はじめは夢のなかで、ついで現実に、近くの川に身を投げるのだ。堪えがたく長い地上の旅を切り上げ、この世の絆をことごとく断つことで、ある〈彼方〉への見通しをえたいという願いであろう。ダニエルが夢のなかで深淵に眺め入るとき、ポールの叫ぶ《La source des eaux vives !》と

ということばは、肉体の破滅とひきかえに得られるべき、ある〈絶対〉の呼びかけであろう。

このふしぎな〈分身〉の物語で、ダニエルという人物のあり方にとくに注意を払わなければならない。小説はダニエルの手記のかたちをとり（そのあとに周囲の人たちのいくつかの証言があって、外部からみたダニエルを解きあかす仕組みになっている）、読者はかれの心の動きをつぶさに読みとることができるのだが、かれの感受性のきわだった特質は、抽象的観念を容易にイメージ化するところにある。つまりかれの場合、ある観念が、*métaphysique* な次元のことがらであっても、ひとつのイメージとして、それも〈分身〉というあらわれをとるほどにまで、いわば感覚的な姿で具体化されていく。たとえそれが外部からみて狂気と呼ばれようと、ひとつの *obsession* が身体の深いところで形成され、養われ、文字通り肉体化されるのだといってよい。こうした心の傾斜について、ダニエル自身もいくらか気づいているようである。

「順序もきめずに書いてきて、今では読み返す気にもなれないこれらの思いは、これまでほとんどいつもぼくの心を占めてきたのだった。少なくとも、ぼく自身について考察をはじめて以来は。ときによると、それはぼくの精神のなかですさまじい様相をとる。それは、ぼくには正確に表現することもできない仕方、ある肉体的な外見 (*une apparence physique*) をまとして、敵意を示すように思われるのだ」(46)

こうした感じ方のなかに、ダニエルが分身を見るきっかけがすでに示されているといえるかもしれない。イメージとして観念をとらえるこの態度に、グリーンの画家的な側面をみとめることは可能であろう。かれがはじめ画家を志した時期のあることを思いあわせてもよく、ことばに対する不信とともに、「わたしは画家が羨ましい。結局のところ、わたしが書きたいことは、画家によってしかよく表現できないことが多いのだ」といったいい方は、最近刊の日記のなかにも見出される⁽⁴⁾。しかし、問題はひとつ

の観念が精神に宿る，その根ざし方にあるだろう。わたしたちはさきに，ジュリアン・グリーンの〈sensualité〉について考え，かれにおける肉感的なものの広さと深さをたしかめたことがあった⁽⁵⁾。問題は観念の側からも考えることができ，抽象的な思想が，感覚が宿ってもいい心の領域に根をもつこと，ひとつの顧慮がその痛切さのあまり，感覚といわば共生を行なうことに，グリーンの精神の特質を認めてもよいと思う。それはまるで，精神が判断と認識の働きからさらに進んで，それ自身のうちで感覚の営みをも兼ねそなえるかのようであり，精神自身に眼がそなわったともいえるのであろう。グリーンに関して幻視家をうんぬんするのは，こうした精神と感覚との緊密な交わりをふまえてでなければならない。身体のおののきとともに神と悪魔の現存を感じたであろう，昔の修道士にも近いのだ。事実，グリーン自身が，やはりいちばん新しい日記のなかで，1966年12月28日の日付で，「精神の眼」について語り，「触知できないものが，わたしには物質的現実としてあらわれるのだ」と述べている。

『地上の旅人』からあと，グリーンがいくつも幻想的な小説を書いていくのは容易に察せられる。しかしモチーフだけではない。ひとつの基本的な感じ方の問題だ。かれが作品や日記のなかで，しきりに理由もなく正体もつかめない幸福感に突然おそわれる体験を語るのも，これもある観念の宿り方として共通の性格をもつだろう。また，グリーンにおいての violence の基盤ということに関連させてもよい。この violence なるものが，直接的なある動機と目的に発するというより，想像力と幻覚のまじわる薄暗いあたりに位置しているからだ。つまり，obsession が hallucination を誘うといったこの感じ方が意味するのは，ひとつの観念・思想が，自らのうちにある概念的な通常の自我の領域を通り越してしまうということであろう。それは感覚的なものと結びつき，想像力に支えられながら，人間のうちの奥ぶかいもの，動物的ときえ呼んでいいもの，のなかに入りこんでしまうといってもよい。いいかえれば，ひたすら内に向かうことで，人

間のさまざまな情念が、もっぱら内部へのエネルギーとして逆流してしまう。愛にしても、グリーンの人物たちは、愛することをほとんど他に向かう行動として示さない。情念はその強さによって、他に及ぶことをやめ、ただただ自分相手のエネルギーとして積み重ねられていく。そこから思いがけない行動の屈曲が生じるのも当然で、作中人物に暴力をふるい、サディズムに走る人たちが多いのは、このいたずらに蓄積されたエネルギーの、あてもない激発であろう。習慣と概念の面では生きることのできない人間として、グリーンの場合、自我がきわめて深いところでとらえられている。その人間の、いわゆる〈人格〉と呼ばれる地層をつきやぶって、いわばある〈自然〉に行きついてしまったという印象である。かれにおいての観念のイメージ的把握ということも、こうしたかれの自我のあり方を考えた上で理解すべきもののように思われる。グリーンが人物たちが、よく自分はいったいだれなのかという問いを發し、自分が自分に属さないのではないかと考えるのも⁽⁶⁾、もっともであろう。かれらは、自分自身というより自分の奥底、ほとんど自分以外のあるものからほとぼしる力によって、つき動かされているのであるから。

ジュリアン・グリーンがこのような感受性の特質は、かれの作家としての基本的な態度と、当然、密接に結びついていく。小説家としての活動の早い時期に、『地上の旅人』のような、幻想的な分身の物語を手がけたという事実は、この点はなほだ暗示的といわねばならない。見方によれば、主人公ダニエル・オドノヴァンは、作者ジュアン・グリーンにとっての、書くことのはじまり、作家たらしめる原動力のシンボルとも考えられるのである。幻覚と化すほどにまで深く観念を抱きつづけること、ある物語として観念を考えると、夢を定着させること、そのために精神の平衡を逸しかねないこと——ここにひとりの作家が誕生するきっかけを見出せるように思えるのだ。ダニエル自身も手記を書く。しかし、ダニエルが創作行為を体現しているとみなせるのは、たんにかれが手記を書くという事実に

よってではなく、自分の思いをひとつの人格としてあらわせるほどに広い、その想像力によってであろう。青年ポールはダニエルのなかでのもうひとつの自我をあらわす。ポールと交わす対話は想像上の自分とのモノローグであるが、ポールを相手にこれまでの生活を洗いざらい告白したとき、もっと幸せで、もっと「活動的な」ひとつの人生が開けようとしたと述べているのは重要であろう。すべてを心の深部で受けとめざるをえない資質をもちつづけるとすれば、せめても、はっきり自己と向きあい、自己の世界を見ずえることで生きのびようとする姿勢であろう。そのとき、自らの世界はひとつのドラマとなる。実際、グリーンにとって小説を書くという行為は、心のなかで数限りない分身たちの間でかわされる、あるいは激しい、あるいは穏やかな、果てしのない対話にほかならないのだ。

「見知らぬ男相手のこの告白に、ぼくは大いに力づけを見出した。数多くのものごとの重荷から解き放たれる思いであった。ぼくの人生が、むしろぼくの人生の退屈で平凡な部分が、今終わりを告げ、もうひとつの生、もっと幸せでもっと活動的な生がまさにこの晩はじまろうとしているとも思えるのだった」(41—42)

この意味でダニエルはグリーン自身の創作活動自体のシンボルであり、この小説は小説家の誕生を物語る小説とみることができると思う。小説自身が小説の生成を物語るというのは、『失われた時を求めて』にはじまる二十世紀小説のひとつの型である。グリーン自身、『地上の旅人』といくらか似た構造をもつ10年後の小説『幻を追う人』 *Le Visionnaire* (1934) について、「『幻を追う人』は小説家の小説だ。マニユエルの夢想は、わたしが小説を書くために行なうやり方をかなりよく説明している」⁽⁷⁾ と述べている。同じことがこの中編についても成り立たないだろうか。グリーンが本格的な作家活動のはじめにこの「小説の小説」と書いたことは重要であろう。

しかし、『地上の旅人』を論じるとなれば、同じ1924年の数か月前に書

かれたパンフレット『フランスのカトリック教徒に反対する』を視野のうちに入れることを忘れてはならない。なまぬるい因習に墮したカトリックの信仰をきびしくとがめる、烈しい小冊子の調子が、この小説を書くグリーンに、また主人公ダニエルに、何ほどかの影響を与えていないということとはありえないからだ。ダニエルをこの時期におけるグリーンと同化することが可能だとすれば、それは *visionnaire* 的気質の共通性だけにとどまらず、この小冊子にもられたような、自らのうちの *fanatique* な信仰をもてあまし、不安な心を抱きつづけるグリーン自身の姿をふくめてでなければならぬ。純粹なものへの渴望にとりつかれ、天上的なものと地上的なものとの間に絶えずひき裂かれたと感じる人間として、もしかしてグリーン自身もダニエルと同様の運命をたどったかもしれないのだ。ダニエルの場合、霊なるものへのひたすらな願いが肉を殺す。のちの『モイラ』においては、逆に肉への渇きが霊を殺す。ダニエルもジョゼフも、ともにグリーンがなりえたかもしれない姿のシンボルであろう。

ダニエルが身を投げたあと、土地の牧師はかれが恩寵に打たれたのだと判断をくだす。かれは「地上の観点に立てば気ちがいじみた振舞いをしたことになるし、摂理の見地からは賢明に行動したのだ」と (65)。けれども、ダニエルの自殺が、はたして牧師のいう通り恩寵の働きと考えられるのであろうか。むろん、かれの行為には霊的な自己消滅の願いがあり、ひたすら絶対の中に身を置きたい、この世を去って一刻も早く永遠のうちに逃れたいという思いがこめられている⁽⁸⁾。しかし、このいささか性急にすぎる願いが神の導きだとは思にくいのであって、ここではやはり、アンドレ・ブランシェ師のように「狂気は明白なのであり、ただ、世界を逃れ、肉体から離れたたいというたましいの基本的な希求が、狂気によってあらわにされるのだ」⁽⁹⁾ と考えるのが正しいのであろう。ところで、牧師といえ、ダニエルは手記のなかで、散歩の途中この牧師に出会って立話を交わし、たいへん楽しかったと記している (46—47)。異端とか不純

とかについて話しあい、かれが極力不純を避け、異端の書など部屋にも置かぬよう火を避けるように遠ざけているといったところ、「ものごとをごっちゃにしてはいけない」といさめられたというのだ。ところがのちに、問題の牧師は、現実には、いちどもダニエルに会ったためしのないことが明らかにされるのである(66)。牧師に会った、会わないのこの食いちがいに、『パンフレット』を書き終えたあとの、伝統的な教会への不信が無意識にでもにじみ出ていると思うのは考えすぎであろうか。それは、ありべき教会に対する、いわば片思いのようなものではないのだろうか。

ジュリアン・グリーンが小説家として出発するのはこのような精神的状況からであった。書くことによってかれが救われたと断定するのは、いささか単純かもしれない。しかし、幻視家的なもの、もしかしてかれを神秘的な修道士にしたかもしれないもの、あるいはまたイメージの過剰から精神の均衡を破壊したかもしれないものを自らのうちにかかえながら生きようとするとき、かれがよりどころにするのもまた、観念をイメージとしてとらえる、こうした幻視家的なものを逆用することによってだった。(グリーンがのちになって⁽¹⁰⁾、「わたしはこの小説を書いているとき、長い間、ポールがダニエル・オドノヴァンの分身だとは知らなかった」と告白するのも、かえってかれにおける幻視の力のつよさを示すものかもしれない。ダニエル自身もさいごまでそのことを知らずにいるのだから、グリーンは自らダニエルの体験を共有したことになる)。ダニエルは死ぬが、グリーンは生きのびる。それも、ダニエルのうちにある幻視家的傾斜を自覚的に生きることによって。visionが明るみに出される。内面世界のドラマがこのとき、外部世界の事件となる。いってみれば、いったんダニエルを死なせることで、グリーンは自らの再生をはかったのかもしれない。ダニエルは、この点グリーンの新しい飛躍のための跳躍台であろう。

自らの幻視家的なものを作品に移し入れること、たしかにここにはひとつのカタルシスのかたちがある。「……もしわたしがこうした狂気を自分

の作品の中に移し入れなければ、それがわたしの生に腰をすえてしまわないとだれにわかろう。わたしにいわば平衡に似たものを保たせてくれているのは、たぶんわたしの作品なのだ」⁽¹¹⁾ とかれはいい、これに似たいい方は日記のあちこちに見ることができる。しかし、このカタルシスがけっして爽快な作業でないことは、くれぐれも注意しておかねばならないであろう。visionnaire たること、それは自分がひき裂かれる苦しさであり、世界で生きていくための一切の習慣的な規準が奪われるつらさだ。それはまた、自分の心をひとつの舞台とすることであり、さまざまのおそろしい visions の跳梁に委ねることだ。それは、いくらかダニエルがもうひとつの人格に移行するときのあの苦悶(50)に似ているのかもしれない。『ヴェルナー』の女流小説家ジャンヌは、《Ecrire un roman, quelle aventure !》と叫ぶ(263)。小説創作は毒をふくむ。そこには、たましいにとって重大な危険がかけられているわけであり、とくに作家がカトリックである場合にはますますそうであろう。反逆と破滅の危機にいつもさらされているからだ。グリーンは小説を書きつづける。しかし一方かれは延々として日記も書きつづける。まるで、書くという行為が小説だけでは充分でないかのよう。小説を書くことの〈後ろぐらさ〉をまぎらそうとするかのように。あるいはまた、小説を書く自分の姿をさらに外から眺め検討することで、いわば〈二重に〉書こうとするかのように。小説を書き、その上小説を書く自分を書き、二重三重に自分の世界を固めたいのかもしれない。日記は、全体として、かれの小説群をとりまきながら、グリーンという人物を語る、もうひとつの大規模なロマンだという印象をもつ。ともかく、かれが小説家としての自分の姿勢をいつもたしかめようとしているのはたしかだ。もしかして、カトリック作家が自分の作家としてのあり方にいつも敏感なのも偶然ではないのかもしれない。モーリアックもまたそうだった。

この物語の主題をなす人格の二重性ということがグリーン終生の問題であったのはいうまでもない。かれにとってはじめての小説のころみは、

21歳のころ『ジーキル博士とハイド氏』の読書からえられた、たましいの交換の物語であったといっているが⁽¹²⁾（これがのちに『わたしがあなたなら』(1947。新版1970) となって結実する)、「わたしはだれなのか」、「どうしてわたしはわたしなのか」という問いがグリーンの小説にみなぎっているといってもよい。ダニエルは自分では知らずにポールに移りかわる。ファビアンは自ら求めて他人の身体を遍歴する。けれども、グリーンは自分の *visionnaire* 的な気質を小説創作のための条件として逆用したとしても、ことがらを人格の二重性自体に限っていうなら、このことにけっして「ひらき直る」ことはできなかつたように思われる。もっぱら人格の二重性にかけて、たとえばネルヴァルのように転生を信じ、それを底知れぬ詩の世界に築き上げるにしては、かれはやはりキリスト教の風土に生まれすぎていた。あるいは、これに「ひらき直る」にしては、かれは詩人ではなかつたというべきであろうか。たとえばある時期東洋思想にこり、〈輪廻〉を主題にした『ヴァルナーナ』(1940) を書く。しかし、これにしても、本来異教的発想であるべきこのテーマにキリスト教による粉飾あるいは解釈をほどこしている。内部に自分ではないほかの自分を感じるというこの自覚が、ネルヴァルにとって歴史と神話の奥底にまでひろがる壮大な〈夢〉であるとするれば、かれにとってはつねに苦しい〈問題〉であった。それは形而上的あるいは宗教的ないくたの思念をさそい、そこから幻想的なロマネスクの世界がつむぎ出されていくにしても、かれは自らそこにひたりきることはなく、かろうじてきわどいところで踏みとどまっている。グリーンの文体が濃密な雰囲気の出、むしろ *évocation* を特色とし、たとえば『地上の旅人』のなかでもシュルレアリスムを思わせる〈自動記述〉まで登場するにしても、かれは本質的に詩人ではない何かをもつように思える。かれの文体の「つつましさ」 *sobriété*、「飾り気のなさ」 *nudité* を指摘し、比喩の少なさをたしかめながら、かれが基本的に分析家だといいきった研究者もいる⁽¹³⁾。幻想的な、ときには悪夢にも似た暗い主題と、透明簡素

な文体との対比、このあざやかな対比のなかにグリーンの作家的態度を見るべきであろう。もしかしたら、この点こそが幻想のうちにのめりこんでいくダニエルと、すれすれで踏みとどまるグリーンとの基本的なわかれめなのかもしれないのだ。わたしたちはここで、ジイドが言ったということば、「狂気が口述し、理性が書き綴るものほど美しいものはない」⁽¹⁴⁾を思い出さないわけにはいかない。visionnaire であることがかれにとって小説家への発条となったという場合、ことばの使用についてのこのような特性を思いあわせておかなければならない。

それにしても、ジュリアン・グリーンにおいての、正統キリスト教的な要素と、そこからはみ出す傾斜とは微妙な問題をはらむだろう。そのためには、1939年の決定的な回心をはさんで、カトリシズムをめぐるかれの心の屈折を子細にだどらねばならない。それはまた、純粹と不純、肉体とたましい、地上的なものと天上的なものとの二律背反をあとづけることにもなるだろう。この世を拒否することと肯定すること、肉体をさげすむことと受け入れること、狂気のごとき絶望につらぬかれることと希望をもつこと——つまりは、心にいつも狂気をいだきつつ、いかにこの世を認めていくか、に帰着するといえる。グリーンはこれら二つのものの振幅を極限にまで生きながら、自らのものを求めようとする。この『地上の旅人』においても、たとえば死についての態度を見るなら、キリスト教のわくを越えるものへの誘引がすでにきざしているように思えるのだ。ダニエルには（むしろダニエル=ポールには）、死が解き放つものとして、あらがいがたい魅惑をもってあらわれる。たえがたい現世を去って〈永遠〉のふところにとびこむこと——ここから、この世をまぼろしと見る見方には一歩であろう。事実、ダニエルはさいごの行動に出る直前、「いきなり、わたしの悲しみはいわれもないのだという気がした。この悲しみの対象自体がまぼろしにすぎないと思えたからだ」⁽⁵⁰⁾と記している。すべてが空だとする考えのなかに、むしろ、空なるものがかえってある厚みと迫力をもって

あらわれてくるという事実のなかに、かれが後年迷いこむことになる東洋的なものの誘いを見ることはできないだろうか。グリーン自身もずっとのちに（1954年）、「一生、わたしはこの世を去る誘惑とたたかいつづけてきた」と書いている⁽¹⁵⁾。

すでも述べたように、ダニエルの死が恩寵の導きだという牧師の解釈に、わたしたちはわりきれないものを残す。しかしながら、狂気にいたるほどのつよさで〈絶対〉を求める人間によってでなければ、真の信仰が守られないというのもひとつの事実かもしれないのだ。少なくとも、いかに狂気であろうと、人間存在の深い悩みに浸透されたこのみじめな男が、神によって拒否されることがありえようとは思われない。牧師の言い分が正しいとするなら、この意味においてでなければならぬ。この意味においてまた、異教への傾斜を見せつつも、ジュリアン・グリーンがカトリック作家の名に値いするのである。

これからさき、ジュリアン・グリーンは胸に〈彼方〉へのあこがれを抱きながら、何とかこの世を生きようとするであろう。死の魅惑と生への執着とにひき裂かれながら、永い彷徨を重ねることであろう。それこそ、つつましいが誠実な、ひとりの「地上の旅人」として。

しかも、その旅路はまだ終わっていない。わたしたちは、すでもその一部分を引用したつぎの感動的な一節を訳出することで、このまづしいジュリアン・グリーンへの接近を、ひとまず閉じることにしたい。まるで1924年の日付をもってもかまわないようなこの文章は、1966年12月に書かれ、最近刊の日記『残されたいのち』（1972）の開巻第1ページ収められた⁽¹⁶⁾。誘惑のつよさと、visionnaireである苦しみと、神への思いと——すべてが痛切なひびきをたたえるこの一節で、わたしたちはジュリアン・グリーンが今日もなお、たたかいつづけていることを知るのである。

「もろもろの誘惑がわたしのなかで言い表わしようもなく、妖しい幻影の姿をおびるという点、わたしには聖アントワーヌと似通ったものがある。

言い表わせないというのも、わたしは身体に具わった眼ではとてもよく見られないものを、精神の眼で見ているからだ。きっとこれは幻覚なのだ。しかし、悪魔の幻覚に向かって、とるに足らぬキリスト教徒がいったい何ができるのであろう。祈ることか。そうだ、何をおいても祈ること。が、こんなとき、それは無益だ。不可能だ。それに、危険をいっそう高めさえする。触知できないものが、わたしには物質的な現実性をもってあらわれてくる。たったひとつの名前、ときにはたったひとつのことばによってすら、さまざまの影像がどっと解き放たれる。そのためにこそ、わたしは孤独がこわい。穏やかなときには、わたしは聖パウロを読み、詩篇を読む。「全能」なおかたの翼の影に、たましいが逃れ、憩う、祝福された瞬間がある。どうかわかってほしい。わたしはさんざんたたかったのだ。この老いぼれの幻視者が、かれの愛しすぎたこの地上の旅にすっかり疲れきったこの旅人が、棺に入れて釘づけにされるそのときが来たなら、少しでいい、かれのことを考えてやってほしい。お願いだから！」

註

(1) テキストは、Jacques Petit 編で昨年刊行されたプレーード版 Julien Green : *Œuvres complètes*, I. による。邦訳は、佐分純一先生の訳でシュネデール編『現代フランス幻想小説』（白水社）に収められている。

(2) これはもしかして、「ペテロの第一の手紙」からくるのであろうか。「愛する者たちよ。あなたがたに勧める。あなたがたは、この世の旅人であり、寄留者であるから、たましいに戦いをいどむ肉の欲を避けなさい」（2-11）

(3) André Blanchet : *La littérature et le spirituel*, II. *La nuit de feu*. (邦訳『文学と霊なるもの一火の夜』思潮社 p.211)

(4) *Ce qui reste de jour*, p.95.

(5) 『ジュリアン・グリーン *sensualité* について』《Etudes françaises》8号

(6) たとえばこの小説でもダニエルの手記のなかに——「ぼくが行ない、考えることの背後に、ぼくにはいつまでもわからない、あらゆる種類のものごとが横たわっているという気持ちを、時おり抱くことがある。このものごとはぼくから、ぼくの頭脳から来るのであろうか。もしぼくから来るのであれば、それはどうしてこれほどぼくには無縁なのであろうか。いったい、ぼくはぼくに所属していないのであろうか」

(7) *Journal*, 1928-1958, p. 220.

(8) 「今ではもう世界が終りを告げ、生命がぼくから取り除かれてもよかった。眼に見えるものはすべて、ただぼくを誘惑するために存在するのにすぎなかった。ぼくを打ちひしぐたましいの衝動によって、ぼくは、たちまち、こんなものを何でも所有することも、地上のどんな情愛も、この世の幸福への一切の希望も、すべて断念した。そのとき、ぼくが精神が肉体から離れ、自分が自分から引き離されたという気持ちであった」(50)

(9) André Blanchet : *op. cit.* p. 247.

(10) Robert de Saint Jean : *Julien Green par lui-même*, p. 71.

(11) *Journal*, pp. 110-111.

(12) *Terre lointaine*, pp. 276-277.

(13) Michel Gorkine : *Julien Green*, p. 163 以下。

(14) Albert Camus : *Carnets*, II. (邦訳『反抗の論理』新潮社 p. 11) に引用。ちなみに、『地上の旅人』が N. R. F. 誌に発表されたとき、ジイドはこの文体のもつ *une nudité inattendue* にいたく驚いたといわれる。この作品が、その後長きにわたる二人の交友のきっかけとなった。

(15) *Journal*, p. 957.

(16) この巻のなかで、1966年の分はこの一節だけである。